

5-^号 四分

人生の大好きな山を、また一つ自分はうしろ

十年一昔だといふ。すると自分の生れたてのまことに昔の事である。まだ、すべが既曰今

年とは、ふんな短いものだうか。
それでよ

之に永遠を恩慕するものの寂しきがゐる。

さりかへつてみると、自分も行くところの詩

五
か
い
乙
き
所。
よ
く
か
う
し
て
書
モ
フ
づ
イ
エ
キ

よし、どんなものであらうと、
よの詩か、

2

No.

藝術の生活は見えられない。藝術が生活か。徹底
は、とのどづらかを撰ばせたにはいかない。
而し自分にとつては二つぶがら、どちらも棄
て。齡の効かもしれぬ。

自分に此の頃にふつて、ようやく、
して丁とが沙々と思ひ今はそれるよく、
ふんといふ童心めいに懲張りの、たが天ぐ
丁れほど深川實在自然の聲があらうか。

(SM印 C U)

十ノ廿 松屋製

No.

花に恥りて實を乞ひ、實を乞ひのみで風流
をわくる。むかしより、ふでをしてあそぶ人多くは、
されば芭蕉が感想の一ついで見るが、ほんと
ま反言ふ花を愛すべし。實なほ食ひつ
べし。

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

3

詩をつくるより田を作れ、といふ。よいか
言である。

詩をつくるより田を作れ、といふ。よいか
言である。

詩人は詩人にひる。

詩人が書けなくなればなるほど、いよいよ、
れしくてたまら無い。

詩人は詩人にひる。

(SM) C D

うしょく、かの道元の絶賛山色はあまりにし
ぞれ店うなんづのいまほと問はれたり、ど
幽遠である。

からふろげで馬鈴薯を石に合掌禮拜する
だけの自らである。

かうしてそれを喰べるにあたつて、大地の

8 7 6 5 4 3 2 1 20 9 8 7 6 5 4 3 2 1

善、詩人下寺也
かざらす

まふとの農夫は田に湯れず

詩
で
み
る。
~~3~~
は。
實
に
、
田
の
田
で
み
る。
詩

詩
も
田
で
は
は
い
。

は
ひ
い
。

は
が
詩
で
は
な
い
。

田
も
詩
で
は
な
い
。

は
の
田
で
は
な
い
。

詩
と
田
で
は
な
い
。

藝術は表現であるといはれる。それ以下

されで、ほんとうの藝術はそれだけではなくては、表現されたもの以外に何かなくてはならぬ。されが大切な事である。何かすこはち宗教について愛せん慈悲の行為に相対するとところの信念である、それは實れが何であるかは、信念の本質におけると云ふじく、はつきりとはいへない。それをある目的とか寓意とかに解されてはいたいへんである。され
のやが藝術をして藝術たらしめる

十ノ廿 松屋製

詩集

の序文